

いぶき3号 平成23年3月号

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第2回：フィンセント・ファン・ゴッホ（1853～1890年）

「日本芸術を研究すると、明らかに賢者であり、哲学者であり、知者である人物に出会う。その人は何を、時を過ごしているのだろうか。地球と月との距離を研究しているのか。ちがう。ピスマルクの政策を研究しているのか。いや、ちがう。その人はただ一本の草の芽を研究しているのだ。—中略—まるで自身が花であるように、自然の中に生きる。こんなに簡素なこれらの日本人が、われわれに教えてくれるものこそ、まずは真の宗教ではないだろうか。もっともっと磊落（らいらく）にもっともっと幸福にならねば日本の芸術を研究することはできないだろとぼくは思う。またぼくらは、因襲的な世界で教育され働いているが、自然に立ち返らなければいけないと思う。」（ファン・ゴッホ書簡全集、みすず書房1990年）



ゴッホが画家になろうと決意した時、彼にたぐいまれな才能があろうとは誰も想像しませんでした。ゴッホの成長ぶりは目を見張るほどの速さで、わずか10年の間に油彩800点、水彩・素描・スケッチ等1000点もの作品を描いています。ゴッホにとって重要なインスピレーションの源は日本の浮世絵でした。彼は多くの浮世絵を収集し、それらを油彩で模写することで彼独特の画面構成や力強い色彩を作り上げていきました。